

即興表現にみられるダンスの技能

Inprovisation and the Power of Dance

体育教室 佐分利育代

I はじめに

何を、いつ、どのような方法で、どの位教えるのかは、創作活動としてまた、体育の教材としてのダンスの在り方と共に常に問われてきた問題である。各学年、各段階に応じたダンスの経験のために教え得るものは何かは、限定された授業時間内での学習内容具体化として明確にされなければならない。

先の研究報告^①では、ダンスの学習内容として、ダンスにおける技術—媒体としての身体運動の持つ感情表出性に関する知識—と、素材としての身体づくりの技術を取り上げ、ダンスの技能の段階として、「とらえられる」「続けられる」「変化させられる」「まとめられる」を設定した。今後の研究課題は実践を通じた確かめと、手がかりとしての具体化であると考えられる。

この一段階としてまず、ダンスにおける技術の中から「力性」を取り上げ、「力性の変化」の習得を目標とした学習指導を実施した。そして、学習の手がかりとしての「力性」の有効性を考察すると共に、学習を通して技能がどのように変化したかを、学習の前と後に同一条件で課した即興表現によって確かめた。

次に、この即興表現にみられた技能の変化が、さらにどのように発達するのかを知るために、第一回目の学習者のうちもう半年のダンス学習を経験した4人について前回と同じ即興表現を課し、その特徴を考察することにした。

II 「力性の変化」を目標とした学習指導と即興表現

ダンスの基礎として最低どのような表現要因（表現運動の構成要因）を学習内容として理解させるべきか明らかにするためには、まず各々の表現要因の習得を目標とした学習が学習者のダンスをどう変化させ得るかを明らかにしなければならない。すなわち、どのような手がかりを、どのような方法で与えて指導すれば、どのようなものが学習者に残り、自由な表現の中に生きるかを明確にすることである。

そこで、この課題解決の一段階として、まず「力性の変化」の習得を目標とした学習指導を実施し、学習指導によって学習者の技能がどう変化したかについて学習前と学習後に即興表現を課して比較考察することにした。考察は、即興表現をフィルム（8mm）に収録し、分析によって行なった。

1. 研究対象

鳥取大学教育学部保健体育専攻および副専攻の1・2年生で、体育実技・ダンス(A)の52年度受講生10名(男子7名,女子3名)

被験者は、4月に2回(計200分)のダンス学習を経験しており、男子学生のダンス経験についてはこれが全てで女子については高校までに経験がある。

2. 学習指導期間と実施場所

1977年7月18日から22日の6日間

鳥取大学体育館

3. 即興表現の実施方法

3~4人のグループ毎に同時に踊らせる。

即興表現の長さは制限しない。

刺激 イ. メトロノーム M.M. ♪=200による均一の鼓動拍で力性的には変化のない刺激

ロ. ドラム(フロアタム)の一打で、力性的には最初に衝激的な強さを持ち除々に消えていくデクレッシェンドの刺激

各々の刺激をあらかじめ一度聞かせ、それから受けたイメージで踊らせる。メトロノームは踊っている間ずっとかけ、ドラムについては、初めに一打のみ与える。

4. 学習指導の実施

「力性的変化」の習得を目標にしたダンス学習の指導内容と経過は表①のようである。(各指導内容における学生の理解の程度をABCの3段階に評価したのももあわせて記入)

表現運動を成立させている要因は、時性、空間性、力性的の側面から考察することができる。身体運動を媒体として行なうダンス表現にとって「力性的」は、強弱・持続・急変等最も原初的に運動と表現に結びついている側面であると思われる。

学習の導入段階で、この「力性的」に視点を置いてダンス学習を進めることを知らせ、グループによる小作品の創作と発表を学習の最後に行うことを伝えた。創作し発表した作品は以下の通りである。

1年生グループ(男子4人)

「暗殺」些細なことで争いになり、3人が1人を殺してしまう。

2年生グループ(男子3人)



「シンフォニー」怠惰な社会感をロック、古典、フォークの曲を組み合わせた伴奏で表現
女子グループ(3人)

「たんぽぽ」春風に揺れながらたんぽぽが咲き、小さいが華やかな開花、風まかせの種の時代を表現

全作品を鑑賞後、作品についての評価を各自自由記述させ、自分のグループについても反省として書かせた。各自で評価した後、全員で批評し合った。

相互評価の自由な記述は表②の通りであり、その内容を「創る。」と「踊る。」に分類し、それぞれの項で力性的に関係あると思われるものを下位に記入したのが表③である。

これによると、動きや作品全体を通しての力性的な面についての評価が最も多く、次に多かった踊り方についての評価の内容も、「一気に踊りぬく」など力性的なものであった。さらに作品構成についても力性的な面から評価されていた。次に多いのは、作品全体の感じや伴奏の効果など、作品のイメージに関するもので、踊る際の気持や動きの技術的な面に対する評価も多かった。また、動

段階		時間	日時	学習目標	学習内容	学 習 活 動	指導者の評価	学生の反応
1	次	1	7月 18日 9:30 ~ 11:30	「力性」の 知的理解	表現運動の 要因 力性の変化 学習計画 ○	①「力性の変化」を手がかりにダンス 学習をしていくことを知る ②「力性の変化」を含む動きの体験 ③作品を創り発表することを学ぶ	B B A	
			2	18日 13:30 ~ 15:30	強 弱 感	動きの 大きさ デザイン 速さ リズム	①歩, 走, 跳を大きさを違わせて動く ②同じ速さでポーズを変化 ③ポーズからポーズへ様々な速さで変化 ④同じ動きを様々な速さで動く ⑤5→4→3→2→1 拍子と変えて動く ⑥アクセントの変化 ⑦短かい一連の動きを速さや大きさを変えて動く	B A A B B C C
2	3	19日 9:30 ~ 11:30		変化の仕方		①だんだん強くなっていく動き(a) ②走→静止 1人, 2人 ③  ○アクセントをポーズ ○<>の感じで ④③から連想して1人で即興 ⑤④を3・4人で ⑥④より全員で習作	A B A A B B C	④「怒り」「夕立ち」 ⑤円形が多い ⑥「怒り」隊形にこだわる
		4	19日 13:30 ~ 15:30	急変と継続	発散する感じとこもった感じ 衝激と流れ	①力をだんだん発散させる動き(b) (a)+(b)を通して踊る ②「うねり」こめられた力, 発散する 力を全員で習作 ③衝激を感じる動きづくり(c) (a)+(b)+(c) (a)+(b)+(c)+流れを感じて即興	A A C A A B	②組体操のような動き, かたちをつくりたがる ③一年生男子は気持ちが続かない
次	5		20日 9:30 ~ 11:30	集中と離散	mass	①(a)+(b)+(c)を集まったり, 離れたりして動く ②グループで異なった5つの隊決を決め, 向き, 方向, 速さを変えて移動(5名) ③「まつり」で習作(全員)	A B A	②「同じ形なのに感じが違う」 ③花火(3つに分かれ) みこしとしし 踊り だんだん去って行く
		6	20日 13:30 ~ 15:30	クライマックス	いくつかの変化とクライマックス 変化とまとめ フレーズ	①いくつかの小さな変化のある動きを 創り, クライマックスになる部分を 即興する(全員) ②「決闘」で習作 ③(a)+(b)+(c)+(d)+即興 ④作品創りのグループ決定	B B A	②「決闘」の部分が動きが 続かない ④長く続けて踊れる
3	次		7	21日 9:30 ~ 11:30	作品づくり	3~4人グループによる小作品	①物, テーマによる即興練習 ②作品創り	A B
		22日 9:30 ~ 11:30		作品発表	発表と鑑賞 授業の反省 ○	①作品の練習 ②作品発表, 鑑賞 ③評価しあう ④授業のまとめと反省	B A A	1年男子「暗殺」 2年男子「シンフォニー」 女子「たんぽぽ」

○印……即興表現 フィルム撮影

表②「グループ作品」に対する学生の相互評価

	自己評価 (自分のグループについて)	暗 殺 (1年男子)	シンフォニー (2年男子)	タンポポ (女子)
H. K	練習不足のわりには良くできた チームワークの勝利		動きにおもしろさがあり、 工夫されていた 伴奏も良い	女らしさ、華麗
K. U	踊りはできるだけ大きくしようとした リズムにあわなく、場面から場面への展開が不満足		ダイナミックな動きや弱々しい動きがあった 音と踊りがあまりあっていない	優雅、女らしさ 題名からの想像とは違っていた
H. H	どうしたら大きな動きができるかと考えた もっと練習が必要		曲想と動きが合っていた 曲と曲のつながりが工夫不足	女性らしい、しなやかでそよ風のような動きは良かった。題も曲も感じがでていた。アクセントがほしかった。
A. N	構成がスムーズにいった 強弱に注意し、満足するものがあった 練習しなかったのは、心から踊るといふ雰囲気を本番までとっておき、フィージングでおどりがかった		音楽の変化と同時に踊りも変化しておもしろかった 強弱や全体のまとまりがない みんなペースがあっていた 終わったかと思わせまた初まるころも良く印象強い	女性的やさしさ、新鮮さ、春になってからの感じが良く出ていた 強弱がはっきりせず盛り上がりがない 踊りと踊りのつながりがうまく全体的にまとまった作品
S. K	いろいろなものを取り入れたつもりでおもしろくできあがった	ストーリーがおもしろく、 楽しい動き方だった 手足の動きをもっと正確にやるときまった		女性らしさがよく出ていた 動き方、移動のし方がよく工夫されていた アクセントがひとつほしい
Y. M	自分を忘れ、音楽にのめり込んで踊った 何も言うことはありません	野性的で男性的 練習を重ねるより新鮮味があって最高であった		乙女チックな中たんぽぽがさわやかに舞っている 優雅もう少し大自然の力強いイメージが欲しい
K. T	5分間という時間を一気に踊りぬくむずかしさ、フット気がぬけてしまう所がどうしてもあるが良かった もう少し踊り込めば、もっと良くなる	曲もエネルギッシュで踊りもそうになっていた。女子とは違った感じ、男性味あふれていた。表現方法も大胆で良かった。内容にもうひとひねりほしい		リズムによくのり、切れ目なく一気に踊ったのがよかった。3人のいきが合っていた。「たんぽぽ」の感じを出すあまり、流れにアクセントがなく、演技自体独創性に乏しい
S. Y	場所のとり方を失敗。花の咲くところを盛り上げようとしたが観る人に伝わらなかった。曲にもう工夫したい動きは思い切ったことができず、既成のものばかりだった	2人が交差する大ジャンプが印象的、はじめ動きがわからなかったが、後半みんなのってきて良かった 感じがでていた	伴奏は工夫がしてあり良かった。場所のとり方も良い。音のつながりも良く、みんなのってやっていたのが一番いい。もう少し動きの変化(特に激しい音楽のとき)がほしかった	
N. Y	音楽にはのれた。曲をもっと工夫し、盛り上がりを作れたら良かった 体が思うように動かないのがはがゆかった。手足、体の脱力はむずかしい	力いっぱい跳んだり、躍ねたりで、リズムにもなっていた。手足がのびのびしたら動きがもっと大きくきれいに見えたのではないか	音楽の工夫ができていた空間の使い方、少人数でも広がった時に強さが消えなかったのは男性的力強さだと思う。決定的な弱さがあればエネルギーの発散がもっと強く出た	
M. U	音楽の工夫がなかった 踊りこみが足らなかつた 盛り上がり不足な感じが目標のふわとした感じは成功した。女の子らしい動きしかできなかった	同じ動きが長いように思う。盛り上がりはよくできていた。大きな動きは良かったが、小さな動きに心配りがほしい 力強さがよくできていた	音楽の効果は良かった よく踊りこんでおり、よくそろっていた ユニークな動きがあった空間の扱い方がよかった 力強さがよくできていた	

表③ グループ作品に対する学生の相互評価

評価の観点		頻度	例
創 る	作品全体	題	3 題名からの想像とは違っていた
		内容	1 内容にもうひとひねりほしい
		感じ	8 優雅 女らしさ 野性的
		構成	9 全体的にまとまった作品
	伴奏	力性的	12 アクセントがほしい、盛り上がりがない
		作り方	5 音楽のつなぎめも良く
	動き	効果	8 曲想と動きが合っていた
		独創性	5 演技自体独創性に乏しい 動きにおもしろさ
		技術	6 手足の動きをもっと正確にやるときまった
		群	5 移動のし方がよく工夫されていた
踊 る	力性的	13 ダイナミックな動きや弱々しい動きがあった	
	練習	5 もう少し踊り込めばもっと良くなる	
	気持ち	6 フィーリングでおどりがかった みんなのってきた	
	踊り方	10 一気に踊りぬく 踊りはできるだけ大きくしよう	
チームワーク		1	チームワークの勝利

表④ ダンス学習後の感想

	感 想
楽 しい	○ダンスはいやだった。でも、のってくるとたのしくてしかたがない。先生になれたら、子供たちにこの楽しさを絶対に教えたい。そして子供たちに感じとってほしい。(女子)
踊 り た い	○4月のことから思うと、かなりのれるようになったし、リズムもつかめるようになった。(男子)
	○スピーカーからメロディが流れると、すぐにでも踊りたくなります。(男子)
	○マーケットでロックが流れている時、知らず知らずに体が動いたことは大変興味深い。(男子)
	○リズムにのってするのは楽しい。(女子)
	○音楽、特にリズムに対して敏感になったように思う。ダンスがこんなに疲れるものだとは思わなかった。(男子)
感 じ る 心	○男性がダンスを踊れたって変だとは思いません。(男子)
	○自分達の年代に「感じる心」というのは、すごく大切だと思う。この授業で少しでも「感じる心」がきたえられたら最高である。(男子)
	○感じるままに行動するすばらしさ。(男子)
有 意 義	○最後の二日間は有意義であったようです。(女子)

きの独創性にも関心があり、「もう少し踊り込めばもっと良くなる」のように練習について述べているものもあった。以上のように、相互評価は力性的な面に多くなされていたが、これは学習目標に対して当然の結果と思われ、学習目標がある程度達成されたのではないかと考えられる。

また、力性的な側面に偏りはあるが、1人平均9項目について評価しており、創ること、踊ることのダンスの様々な側面に対して学生が目を向けていることがわかり、「観る、技能としての鑑賞力も得られたと考えられる。

表④にまとめた作品評価と同時に記入させたダンス全体に対する感想によると、「楽しい」「踊りたくなる」「知らず知らずに体が動いた」「のれるようになった」など、ダンス学習への動機づけの効果がみられた。そして「ダンスがこんなに疲れるものとは思わなかった」という新たな発見や、「リズムもつかめるようになった」「リズムに敏感になった」という自分自身の学習成果の認識、「最後の2日間は有意義であった」のように作品創りや学習の積み重ねに対しての満足感と意欲をも感じられた。

学生の感想から、今回のダンス学習が、学生にダンスを好きにさせるという意味では効果があったものと考えられる。

5. 即興表現における変化

「力性的変化」を目標としたダンス学習の前と後の即興表現について「踊る、技能に関しては何が変化したか」「観る、技能についてはどうであったかのそれぞれについて考察する。

「踊る、技能ではメトロノーム、ドラムによる表現共に表現時間が延びており、学習前よりも長く踊り続けられるようになったと言える。メトロノームとドラムとを比較すると、7名の者についてメトロノームの刺激による表現の方がより長くなった。

動きに関しては表⑤及び表⑥より、動きの種類が増加、動きの内容の変化があげられる。動きの内容では、歩や走などステップ中心の動きから、全身的な動きへと変化し、また、5名の学習者には、単一の動きから2つ以上の動きを結合した動きへの変化もみられた。

動きのくり返しは、学習前では、メトロノームで3人が1回、ドラムでは3人が1回、2人が2回使用していたが、学習後では、メトロノームでは5回以上(平均8回)、ドラムでは3回以上(平均6回)の繰り返し部分を持って表現していた。繰り返された動きの内容も、学習前には同一の動きであったのに対し、学習後は、同一の動きの繰り返しの他に、速さを変化させていたり、素朴ではあるがモチーフとなる動きを変化させていく繰り返しが多くなった。

動きの切れ目や、続き方をみると、リズムの変化が感じられる。特にメトロノームでは、学習前の動きは、メトロノームの出す鼓動拍のままのリズム拍であったのに対し、学習後では、メトロノームの鼓動拍を感じながらも自分のリズムで動きを続けたり追い込んだりできるようになった。

以上のことより、「観る、技能に関しては、長く踊り続けられるようになり、動きの語彙が増し、盛り上がりのある動きができ、ひと続きの動きとして踊ることができるようになったと言える。

「創る、技能に関しては、考察の対象が即興表現であることから、「踊る、技能と重複する点もあるが、動きの繰り返しや、それによる盛り上がりとまとまりの感じのある表現ができたことがあげられる。それと関連して、学習前の表現では、終りのポーズや、明確な終りの感じを持って踊った者が1人であったのに対して、学習後では全員が終りの感じのわかる表現を行なった点が大きな違いとしてあげられる。また、表現後に、「どのようなイメージを持って踊ったか」について紙に書かせたものからは、イメージがより具体的に把握できるようになったことがわかる。

「観る、技能としては、即興表現が自らの表現を感じながらさらに踊り続けるという性格を持つ

表⑤ 学習前と学習後の「即興表現」の比較 — 動き — (メトロノーム)

学習者		M.U		S.Y		N.Y		K.U		A.N		Y.T		S.K		Y.M		H.K		H.H	
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
表現の長さ (倍率)		213	701 (3.3)	108	619 (5.7)	202	490 (2.4)	167	408 (2.4)	146	699 (4.8)	181	468 (2.6)	130	467 (3.5)	204	340 (1.7)	135	327 (2.9)	142	403 (2.8)
動きの種類	ステップ主体の動き (脚)	4	0	3	1	3	2	2	2	2	3	3	2	2	1	1	0	1	0	2	0
	全身的な動き (脚, 腕, 胴体)	1	7	0	8	2	6	2	5	1	5	1	4	1	7	1	4	0	5	1	5
	結合した動き	0	0	0	5	0	2	0	1	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0
動きのくり返し	同じ動きで	1	2	0	1	0	1	1	1	0	2	0	2	0	1	0	1	1	4	0	1
	速さを変えて	0	3	0	2	0	1	0	1	0	1	0	2	0	1	0	3	0	0	0	1
	モチーフを変化・発展	0	5	0	4	0	9	0	6	0	7	0	4	0	3	0	3	0	6	0	5

表⑥ 学習前と学習後の即興表現の比較 — 動き — (ドラム)

学習者		M.U		S.Y		N.Y		K.U		A.N		Y.T		S.K		Y.M		H.K		H.H	
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
表現の長さ (倍率)		152	390 (2.6)	111	479 (4.0)	124	573 (4.6)	99	207 (2.1)	187	350 (1.9)	156	346 (2.2)	119	452 (3.8)	166	578 (3.5)	177	498 (2.8)	184	393 (2.1)
動きの種類	ステップ主体の動き (脚)	3	0	3	1	0	1	1	1	0	0	1	1	2	0	1	0	2	0	3	1
	全身的な動き (脚, 腕, 胴体)	1	5	1	5	0	5	1	3	1	5	1	4	1	5	1	2	1	5	1	4
	結合した動き	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	6	0	0	3	0	0	0	1
動きのくりかえし	同じ動きで	0	2	0	0	0	1	1	1	0	2	0	2	2	1	0	2	0	0	1	1
	速さを変えて	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	1	0	3	0	1
	モチーフを変化・発展	0	5	0	5	0	4	0	2	1	5	0	4	0	3	0	6	0	2	1	2

と考えられることから、「内観」する技能が必要と思われる。分析結果と、学習者自身のイメージを照合すると、学習前では一致点が明らかでなかったが学習後では、イメージ a に対して動き 1, 2, 3, 4, イメージ b に対して動き 2⁻¹, 5, 6, のように、イメージと動きとの間に一致点が見られた者が、メトロノームでは 6 人、ドラムでは 7 人あった。

また、撮影フィルムを 3 人の大学生（お茶の水女子大学、表現体育科の 3 年生でダンスについては熟練者である）に観てもらい、「どのようなイメージを受けたか」についての自由記述を得たが、それを表現者のイメージの記述と比較すると、学習後のメトロノームでは 6 人、ドラムでは 5 人の表現について類似がみられ、他の者についても学習前よりも多くのイメージを与える表現になったといえる。例えば、学習者 N.Y. のドラムによる表現では、学習前の、「爆発の前の静けさ—爆発—爆風による木々の揺れ」という学習者のイメージに対し、「何も感じられない」「暗い感じ」「重く感じるしい、ぐったりした感じ」という鑑賞者の感想であった。それが、学習後の「暗中模索」に対しては、「どこへも持っていきようもない、何にもぶっつけようのない悲しみ」「暗闇の中をまよっている感じ」「悲しみの中に漂っている感じ」のようなイメージを受けている。

このように、学習者には、まだ不十分ではあるが、自らの踊りを感じとったり、フィードバックしたりできる「内観」する技能が得られたと思われる。

学習前と学習後の即興表現の比較より、様々な動きをみつけたり、繰り返しや追い込みによって盛り上がりやまとまりの感じを出すこと、それを踊り続けることができるようになったと思われる。しかし、学習の段階での問題でもあるが、動きを結合してフレーズ化することは不十分であり、ドラムの一打ちの余韻を持って踊り続けることも、メトロノームによる継続刺激の場合よりも不得意であった。

6. 学習の手がかりとしての「力性」の可能性

「力性の変化」を手がかりに進めた今回のダンス学習によって「踊る、技能や「観る、技能については、ある程度成果が上がったと認められる。特に、ダンス学習の経験なく大学生になった男性という困難な対象にも、「力性の変化」を習得することから入る導入法が、表現の楽しみを与え、学習時間という限界内での進歩をみるにいたったことは、「力性の変化」が導入としてダンスの表現要素から採り上げる第一次的なものであるとみても、ある程度良いのではないかとと思われる。

しかし、被験者の人数、個人差など異なる対象についても今後確かめる必要があり、他の表現要因についても実施すべきである。

III 3 回目の即興表現にみられる技能の特徴

II の授業実践による技能がどの程度のものであるか、また、さらにどのような技能が身につけられる可能性があるのかについて知るために、53 年度体育実技ダンス B の受講生（鳥取大学教育学部保健体育専攻および副専攻の 3, 4 年生）に対して、授業の最後に、前回と同一条件による即興表現を課した。ダンス B は 3 年次指定の選択科目で、ダンス A の単位取得者を対象としている。53 年度の実験者は 9 名（男子 3 名、女子 6 名）であったが、即興表現の比較は、先に 2 回の即興表現の資料がある 4 人を中心に、他の 5 名の資料も参考にしながら行うことにした。4 人のうち、Y.M. と S.K. は男子、M.U. と N.Y. は女子である。

学習指導は、昭和 53 年 10 月 16 日から昭和 54 年 2 月 5 日までの毎週月曜日、午後 1 時 10 分から 2 時 50 分まで、動きのパターン化とフレーズ化の探求を目標に、様々なテーマによる作品創りを

中心に行なった。これはパターン化とフレーズ化において不十分であったとした先の学習指導研究をふまえ設定した目標である。

1. 即興表現の実施と分析の方法

①即興表現の実施方法

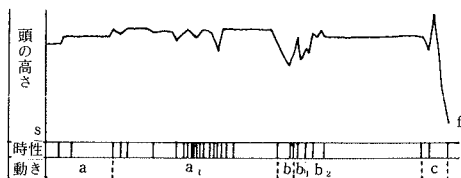
即興表現は、昭和54年2月5日、学習の最終日に学習のまとめとしての作品発表会の後に課した。メトロノーム、ドラムの順に3人ずつ行なった。場所は鳥取大学第1体育館である。即興表現の後表現の内容について各自自由記述させた。

②分析方法

即興表現は、8mmカメラ(24コマ/sec)で撮影し、頭の高さの変化と、運動の種類について分析した。なお、頭の高さについては、表現が前方や後方への移動も行うことから、ジャンプ、立つ、まげる、すわる、伏せるの5点を手がかりにコマによる大まかな変化を図①から⑧のようにとらえた。また頭の高さの曲線の下小さな線は、動作の変化点を示すもので、これによって時性的変化がわかる。その下には動きの種類を記号化して記入した。記号は、運動要因②に多少違いがあっても、モチーフとして同じ動きと評価できるものを明確にするために使用した。

2. メトロノームによる即興表現の特徴

①Y.M.の即興表現



○表現時間 22秒

○動きの内容

- a 片手を前にあげ、脚を開いて立つ
- a₁ 歩から走へ回転を混じえながら速さを徐々に増し、アクセントとともに a のポーズで静止する。

図① Y.M. の即興表現 (メトロノーム)

b 体を捻転させながら前を向いて手を開き後ろを向いて縮める

b₁ b の繰り返し 反動のように小さく弱く速く行う

b₂ b の繰り返し 前を向く時に体の回旋を加えて大きく強く速く行う 回旋のアクセントと共にそのままポーズで静止

c ジャンプから伏せる

○動きのモチーフ 2種類 a, b.

○運動要因 4種類 a-3 b-3

○ダイナミックス (力動性)

a から a₁ (終りにアクセントのある漸強)

a₁ の静止から b, b₁, b₂ (終りにアクセントのある漸強)

b₂ の静止から c (終りにアクセントのある漸強)

②S.K.の即興表現

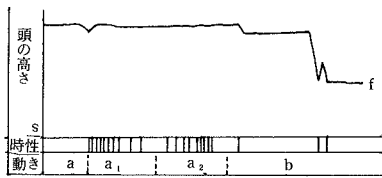
○表現時間 18秒

○動きの内容

a 手も脚も伸ばしたかたいポーズ

a₁ a の形で急に速く歩き回転しながら徐々にゆっくり歩いて止まる。

a₂ a₁ の繰り返し、急激的に静止する。



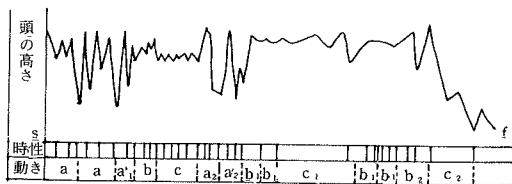
図② S. K. の即興表現 (メトロノーム)

- b 緊張した静止から、首、腰から上
と順に脱力する
- 動きのモチーフ 2種類 a, b
 - 運動要因 4種類 a-3 b-2

○ダイナミックス

- a から a₁ (終りにアクセントのある漸強)
- a₁ の静止から a₂ (終りにアクセントのある漸強)
- a₂ の静止から b (アクセントをつけた漸弱)

③M.U. の即興表現



図③ M. U. の即興表現 (メトロノーム)

○表現時間 25 秒

○動きの内容

- a 脱力しながら両脚で跳んで跳んで落ちる
- a₁ a を2度のジャンプでやめる
- a₂ a を速く、落ちるところだけを強く行う
- b 手を横へ振りながら3歩歩き、3歩目に伸びてアクセントをつける。

- b₁ b の3歩目を後ろに足をあげる。
- b₂ b を歩かずに体を低いところから振り上げ、ジャンプする。
- c 体をまるめ、前後に追いあししながら手を体前で揺らす
- c₁ c を歩きくゆっくり行なう
- c₂ ゆっくり手を揺らしながらすーっと走り少しづつ伏せる。

○動きのモチーフ 3種類 a. b. c.

○運動要因 5種類 a-2 b-3 c-2

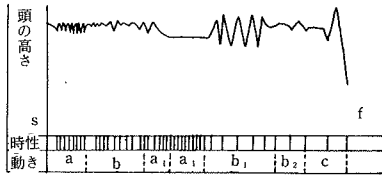
○ダイナミックス

- a₂ から c (加速的な漸強)
- a₁ から c₁ (保持的な漸強)
- b₁ から c₂ (漸強から漸弱)

その他の動きの特徴

- a₂ から b, b₂ から c₂ は、続きの動きとして感じられる
- a と b と c の組み合わせの繰り返しがみられる
- a と b は3拍子の動き、c は4拍子的な動きである。

④N.Y. の即興表現



図④ N. Y. の即興表現 (メトロノーム)

○表現時間 19秒

○動きの内容

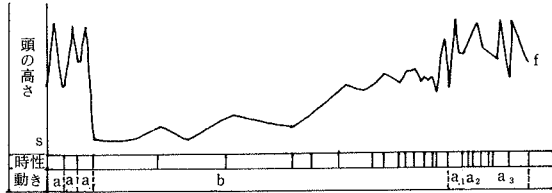
- a 体前で手を上下しながら膝を軽く前に曲げて上げた走あるいはホップ
- a₁ aを腰を折り手をさらに前に差し出した形で行なう
- b 手を横に開いて追いあして横へ
- b₁ 手を横に開いたり、体前で閉じたりしながら、脚を大きくあげて右横へ歩く
- b₂ b₁をゆっくり左へ行なう
- c ジャンプ 伏せる

- 動きのモチーフ 2種類 a, b
- 運動要因 4種類 a-3 b-3
- ダイナミックス
 - aからb (同テンポでの漸強)
 - aからb₁ (テンポダウンでの漸強)
 - b₂(b₂とc) (終りにアクセントのある漸強)
- その他の動きの特徴
 - a₁はaの, b₁はbの完成形と感じられる
 - b₂からcは, b₂とみてよい
 - aとbの組み合わせの繰り返しがみられる

- ㊦表現時間は20秒前後であった。他の学習者を加えてみても9人中8人までが、15秒から25秒の間であった。
- ㊧表現全体が2から3のモチーフで成り立っている。
- ㊨各モチーフはそれぞれ2から3の運動要因を持っている。
- ㊩時性や形態性、力性の要因を変化させてのモチーフの繰り返しを使い、ダイナミックスを変化させている。
- ㊪モチーフの組み合わせの繰り返しがM.U.とN.Y.が使っていた。
- ㊫強さは異なるが似たダイナミックスのパターンを持つ3つの部分によって全体が流れのあるひとまとまりになっている。
- ㊬3つのダイナミックスの変化は、Y.M.やS.K.における静止の間もとぎれることなく続いているように感じられる。
- ㊭M.U.とN.Y.は、動きの組み合わせを繰り返しながら、小さい追い込みから大きな追い込みへとダイナミックスを変化させている。
- ㊮M.U.では3拍子と4拍子の組み合わせのリズムを、アクセントやテンポを変化させている。
- ㊯N.Y.では、動きながら、動きを創り出していく様子が見られる。
- ㊰メトロノームによる継続的刺激は速さの変化やアクセントを持たない鼓動拍であるが、各自鼓動拍をとり入れながら、アクセントを変化させて独自のリズムをつくっている。

3. ドラムによる即興表現

① Y.M. の即興表現



図⑤ Y.M. の即興表現 (ドラム)

○表現時間 26 秒

○動きの内容

- a ジャンプターン(両脚跳び)
- a₁ ジャンプ
- a₂ 走ってリープターン(片脚跳び)
- a₃ 走ってねじりながらジャンプ2回して伏せる。
- b 体を振動させる。

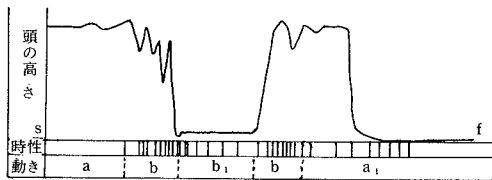
○動きのモチーフ 2種類 a, b

○運動要因 5種類 a-4 b-1

○ダイナミックス

a (強) b (加速的な漸強) a₁からa₃ (強からさらに強へ)

② S.K. の即興表現



図⑥ S.K. の即興表現 (ドラム)

○表現時間 23 秒

○動きの内容

- a 立って両手を徐々に上げる
- a₁ 両手を上げ、手を揺らしながら沈む
- b 両手を前にし、体を屈伸させながら速く回って沈む
- b₁ 両手を床につき、bの余韻のようにゆっくり逆回りに入っていく
- b₂ 立ちながら速く回る

○動きのモチーフ 2種類 a, b

○運動要因 4種類 a-3 b-2

○ダイナミックス

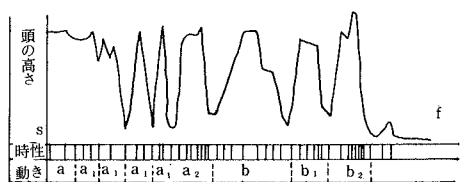
a (保持的な漸強) bからb₁ (強弱強) a₁ (保持的な漸弱)

③ M.U. の即興表現

○表現時間 21 秒

○動きの内容

- a 手をあげた静止から首だけをカックンと落とす
- a₁ 体全体をカックンと落とす a₂ 走ってカックンと上から落とす



図⑦ M.U. の即興表現 (ドラム)

b 歩きながら手を回し伏せる

b₁ 歩いて、ジャンプして、手を速く回して伏せる

b₂ 少し頭を持ちあげてから伏せる

○動きのモチーフ 2種類
a, b

○運動要因 4種類 a-2 b-4

○ダイナミックス

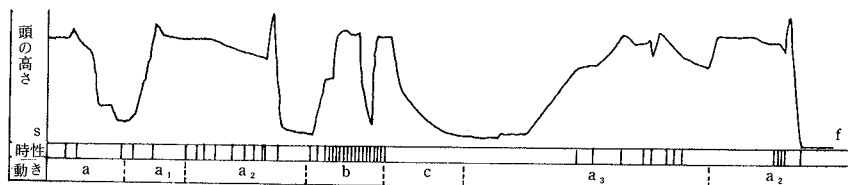
aからa₂ (アクセントの繰り返しによる漸強) bからa₁ (加速的な漸強)

b₂ (アクセントをつけた弱)

○その他の動きの特徴

bはaの変形とみられる

④ N.Y. の即興表現



図⑧ N.Y. の即興表現 (ドラム)

○表現時間 21秒

○動きの内容

a 片手を上に背伸びしてから体をゆっくりななめに沈める

a₁ ターンしながら上に伸び体をゆっくりななめに沈める

a₂ 歩から走に移りジャンプして沈む

a₃ ゆっくり起き上がり2度ターンして伸び体を少し沈める

b 手を速く上下しながら体を大きく上げて下げて上げる

c 体を沈める

○動きのモチーフ 2種類 a b

○運動要因 5種類 a-4 b-2

○ダイナミックス

aからa₂ (速さの変化を含むアクセントの繰り返しによる漸強) b (強)

c (保持的な漸弱) a₃ (保持的でやや弱い漸強と漸弱)

a₂ (終りにアクセントのある漸強)

- ㊦表現時間は、N.Y. が長いがあとの3人は20秒台で、全学習者についてみても20秒台が9人中7人であった。
- ㊧表現全体が2つのモチーフから成り立っている。
- ㊨2つのモチーフのうち、一方が多く運動要因から成り、もうひとつはそれに比べて単純な動きといえる。全体としては4から5の運動要因を持っている。
- ㊩モチーフの変化による繰り返しが使われ、ダイナミクスの変化をつくっている。
- ㊪ダイナミクスのパターンの異なる部分が集まり、全体としての流れとまとまりになっている。
- ㊫N.Y. を余いて、表現全体が3つの部分から成っていると思われるが、各部分の始めと終りは、隣接する部分と、とぎれることなく続いて感じられる。
- ㊬刺激は、ドラムの一打だけであったが、表現の中に、強勢は2度起っている。

4. 2つの刺激での表現における共通な特徴

- ㊦表現時間は20秒前後であった。
- ㊧表現全体が2つあるいは3つのモチーフから成っている。
- ㊨運動要因は4から6種類使われている。
- ㊩モチーフの変化での繰り返しによるダイナミクスの変化がみられる
- ㊪全体は3つの部分から成っており、各部分のダイナミクスの変化はとぎれることなく続き、全体としての流れとまとまりをつくっている。
- ㊫刺激そのものがないダイナミクスの変化がみられる。

5. 各刺激の特徴

- ㊦表現を成立させているモチーフの内容としての運動要因の数より、メトロノームでは各モチーフが同価値と考えられるが、ドラムでは一方がより主要なモチーフであり、もう一方はその補助的なものと考えられる
- ㊧表現全体のダイナミクスの変化が、メトロノームでは、類似したダイナミクスのパターンの繰り返しでつくられたのに対して、ドラムでは異なるパターンの組み合わせによってひとつの流れになっている。

6. 前回の表現と比較した3回目の表現の特徴

表現のイメージについての記述を比較すると、メトロノームでは、イメージのら列からひとつのイメージヘテマ的が絞られたことがわかる。メトロノームの3回目の表現における表現時間の短縮はこのことによっても理由づけられる。それと同時にメトロノームに対するイメージに個性がでてきたこともあげられる。また、イメージの中にも力の起伏が感じられるようになった。

ドラムの一打に対するイメージで特徴的なことは、2回目では1回目と比べ、余韻にまでイメージが広がったことがみられるが、3回目ではさらに、最初の一打のイメージがもう一度形をかえて返ってきていることがあげられる。このことは、運動分析においても特徴づけられる。

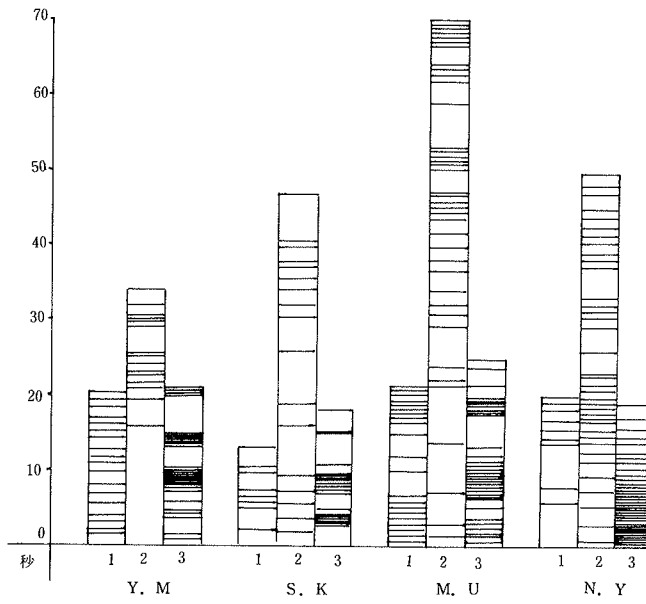
図⑨と⑩は、時性を取り出して、3回の表現を比較したものである。これによると、2回目で大きく伸びた表現時間がまた短かくなっている。しかし、速度の変化による波は3回目では2回目より明確になり、繰り返しから全体のまとまりへとつながる状態を予想することができる。それに比

表⑦ 即興表現のイメージの比較（メトロノーム）

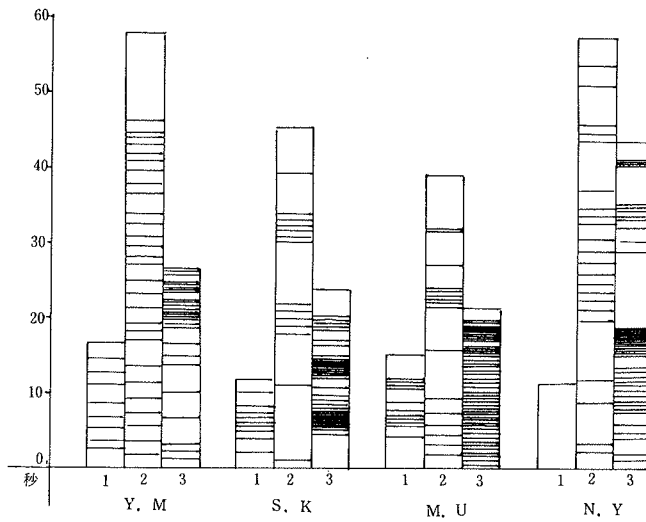
学習者		イメー ジ
Y. M	1	おもちゃの人形のつもりだったけれどやっている動作はちがうものだった—内野守備の感じ
	2	エネルギーを与えられたおもちゃが、ほんの短い間精—ぱいうごく
	3	「白い紙に何か書くのちょっとこわいな」そんなことを思ってたまどっているエンピツさん やっぱり書きちゃおう エンピツのぎこちなさの表現
S. K	1	おもちゃの兵隊 とけいの歯車
	2	つり人形 ぜんまい フライパンではじける豆 マラソンランナー
	3	木ぼりの人形が「メトロノーム」に起こされたが、やっぱり人形は人間になれないでしまった。
M. U	1	マリオネットの感じ、するどく機敏に動いている感じ
	2	マリオネット、堅い動きと、機敏な動き、糸がきれたり、テンポがはやくなったり、調子はずれになる。
	3	しずくがしたり波紋ができる。
N. Y	1	こまかい動き、マリオネットが緊張して脱力する感じ
	2	カチカチというのを無視して調子をとることだけに使い、音とは全く別の感じでうごく カニ
	3	軽快に、リズムにのって、カチカチと

表⑧ 即興表現のイメージの比較（ドラム）

学習者		イメー ジ
Y. M	1	突然ガラスが割れてガラスをとり除く作業をやっている
	2	地球の中心で大きな鐘の音が世界中に鳴りひびき、すべての大地にその音が伝わっていき、その余韻が残る。
	3	何物かによって大きな衝撃をうける。一瞬身のひきしまるような思いで身動きできず、思うように体がうごかない。そのうちその衝動が自分の中でうずまき大きな痛みが走る。
S. K	1	落雷して木がメラメラ燃えた。
	2	ショック 神の御前にてめいそうにふける 死者の復活 闇から太陽へ
	3	ぜんまいが、切れてはじけて、またちちんだ
M. U	1	深い眠りから目覚め、音と同時にせわしく動き出す
	2	憤火 マグマが盛り上がり、そして音と同時に、マグマ、岩石、その他諸々噴出してくる。すそ野へ広がってゆく。
	3	はりつめていたものが爆発しくずれてしまう
N. Y	1	響き しずけさ
	2	暗中模索、暗闇でドッキリ、模索しながら力をため、それを発散することのくりかえし。音は静けさをやぶる
	3	乾燥した心 無



図⑨ 即興表現の時性の比較 (メトロノーム)



図⑩ 即興表現の時性の比較 (ドラム)

べ、2回目での追い込みは、次の波を引き起こすほどの力になっていないこと、すなわち、全体の流れへ有効にはつながっていないことがわかる。また、2回目では追い込みの状態の刺激による違いは顕著ではなかったのに対し、3回目ではメトロノームでは短時間で波の繰り返しであることと、ドラムでは比較的波長が長いことがわかる。このことより3回目の特徴として、刺激の特徴をとらえ、全体として流れを持つひとまとまりの表現ができるようになったといえる。

3回目の表現時間の長さは、ダイナミクスの変化を持ったひとまとまりの動き（フレーズ）の長さではないかと考えられる。

さらに、表現内容としての動きについてみると2回目では運動語彙の増化がその特徴としてあげられた。表⑨と⑩はそれぞれの表現におけるモチーフの数と運動要因の種類であるが、メトロノームの3回目では明らかな減少がみられ、ドラムでもモチーフの数が少なくなっている。これは、メトロノームについては、イメージの焦点がしぼられたことに起因することがわかる。ドラムでも、音へのイメージと同時に動きのイメージも焦点が明確になったことによるものと考えられる。

表⑨ 即興表現における動きの内容の比較（メトロノーム）

学 習 者	Y. M			S. K			M. U			N. Y		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
即興表現	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
モチーフ	0	2	2	0	5	2	0	4	3	1	6	2
運動要因	2	4	6	3	6	4	5	7	5	5	8	4

表⑩ 即興表現における動きの内容の比較（ドラム）

学 習 者	Y. M			S. K			M. U			N. Y		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
即興表現	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
モチーフ	0	2	2	0	3	2	0	4	2	0	5	2
運動要因	2	5	5	3	5	4	4	5	4	1	5	5

以上のことより3回目の即興表現における技能の発達の特徴として次のようにまとめられる。

- ㊦ イメージの焦点が絞られ、動きのモチーフが明確につかめるようになった。
- ㊧ 各部分のダイナミクスの変化がとぎれることなく続き、全体として流れとまとまりの感じを持つフレーズとして踊れるようになった。
- ㊨ 刺激の特徴をとらえたダイナミクスの変化で表現できるようになった。
- ㊩ イメージが、特にメトロノームでは個性的になった。

2回目の表現でみられた特徴ある技能の変化は、したがって、以上の特徴に向けて発達の可能性があるといえる。

7. 3回目の即興表現にみられる技能のリズム化としての特徴

ランガーは、あらゆる運動を身振りに変えるものとしてリズムをあげ、「現実からどのようなモチーフが舞踏に入ってきて、それらのモチーフはその入ること自体でリズム化され形式化さ

れる」としている^③。また、邦正美は、舞踊運動はリズム的であるところにその特徴があるとしている。そして、「リズムによって運動は不必要な分子を除外し、美的に統一されて一つの型を得るのである。リズムは運動の要素の分散を防ぎ、その統一的結合性によって最も効果的な表出を可能ならしむる。……リズムの目的とするところは、運動の要素を形成することにある。」^④また、「リズムをつくることは舞踊のモチーフをつくることである。したがって創作学習段階に入ってはリズムをつくる実習を同時に行うのである。」^⑤のようにダンスにおけるリズムの意味を述べている。

即興表現においてイメージの焦点が絞られたこと、動きのモチーフが明確になったことは学習者の技能がリズムに向けて発達的に変化したことを示すと考えられる。すなわち、モチーフができることは、その繰り返しや、表現要因の変化、他のモチーフとの結合などによって時間と力の融合としてのリズムをつくり、ダイナミクスの変化によって表現全体をひとつづきの流れをもつ形式として感じさせるのに役立つ。

そして、どのようなリズムをつくり出すかについて石井漢は、「自分のうちに流れている『リズム』」としている^⑥が、ドウブラーは、「リズム形式は心的体験を反射する通路である」と述べ、内的リズムと外的リズムという言葉で表わしている^⑦。内的リズムとは、体験によってひきおこされた情緒のリズムであり、外的リズムとは、運動によって眼前化されたイメージのもつリズムである。この2つのリズムが一致するところに表現形式としてのダンスが成立する。

また、2つのリズムが一致した、すなわち、「思うように動けた」と感じるのもまた運動を通してである。踊り手は、踊っている時、その筋肉運動知覚を通して自分のダンスを見ている。そして、この筋肉運動知覚は次の新たな感情のリズムを引き起こす。

ランガーは、身振りは視覚的現象でもあり、筋肉的な現象でもある。舞踏家は自分自身の肉体感覚で自分の仮象を知るるのであるとし、この閉じた領域のなかで自分の理念を発展させるとしている^⑧。

メトロノームとドラムの刺激による表現が、それぞれ特徴的なダイナミクスのパターンを持って表われたこと、ドラムの表現において、一打の強勢が再び起っていること、メトロノームに対するイメージがより個人的になったことなど、リズム化が学習者の内部にまで深まった、換言すれば技能としてリズムが定着したと評価できる。

IV 即興表現にみられる技能の段階

3回の即興表現を、先の研究^⑨において設定した技能の段階に照射すると、第1回(学習前)は、「とらえられる」(あるいは「それ」以前)、第2回(学習後)は、「変化させられる」、第3回は「まとめられる」段階であったと思われる。そして、3回目の表現の特徴として考察したように、技能がリズム化に向けて発達しているとするならば、各段階は、「リズムをとらえられる」「リズムを続けられる」「リズムを変化させられる」「リズムをまとめられる」と言い換えることができる。各即興の表現の特徴はしたがって、具体的な技能の内容として考えられる。

「リズムをとらえられる」・イメージを強弱の違いとして把握

「リズムを続けられる」・強弱の違いとして把握できたイメージの持続、すなわち運動の連続、繰り返し

「リズムを変化させられる」・イメージの多様化、運動語彙の増化、それによる表現時間の延長、アクセントの変化

「リズムをまとめられる」・イメージと運動のモチーフの焦点を絞ることと明確化、流れを持つ全

体として形式化

学習指導は、これらの技能の内容を学習目標として行われ、そのための学習内容—学習の手がかりとしての技術—選択される。

このことから、「とらえられる」段階から、「変化させられる」段階へ、ダンスの導入としての先の学習(53年度ダンスA)において、リズムを作る要素である「力性」を手がかりに選んだことはある程度妥当であったと考えられる。

また、即興表現の刺激としてメトロノームとドラムを用いたが、表現内容の考察から音の刺激についての次のような指導の手がかりを得た。

「とらえられる」段階では、すぐに動きとしてとらえられるように、ドラムのように印象的なものを選んだり、ドラムとメトロノームのように異なるイメージを持った刺激をできるだけ沢山与えるように配慮されることが必要である。そして、いろいろなイメージが、次から次へと沸いてくる次の段階へ向けては、メトロノームのように継続的な刺激が有効であることがわかる。変化が全体の流れの中での盛り上がりとして感じられるための練習にはやはりドラムのように起伏のはっきりした刺激が考えられる。

メトロノームのように起伏のない音や、ドラムの一打のあとの静かさの中に学習者が自分の流れを創って踊れるようになった時、その流れを引き立たせ、次の流れを導くように、伴奏として一歩退いた音の在り方が出現する。

「まとめられる」段階において技能は作品創作への準備ができたと考えられる。即興表現にみられる技能の段階は、スケッチから次第にイメージと動きを確かめながら作品へという創作の過程によく似ている。N.Y.のメトロノームでの表現に動きをより表現的なものに創り変えていく過程がみられたように、媒体としての動きの探求も即興を通して行われる。フレーズとしての即興表現の持つダイナミックな流れは、さらに大きな表現形式としての作品を貫ぬいて現われてくる。学習の重点は作品の構成の探求、媒体としてのより効果的な動きの探求へと移行する。

V おわりに

学習指導を通しての即興表現に現われたダンスの技能の特徴を考察するなかで、技能がリズムに向けて発達しているのではないかという今後の学習指導研究への指針を得た。2回目の即興表現では、イメージの多様化、運動語彙の増化、表現時間の延長、くり返しや追い上げによる盛り上げ、単発的なアクセントなど、表現の各側面がバラバラに出てきたという感が強かったのに対し、3回目では、モチーフの明確化、各部分が全体としてのひとまとまりの流れとなっているなど、各特徴がリズムという力と時間の関係の中に吸収されたように感じられたからである。

この考察は、研究の対象が4人の大学生であったこと、2つの刺激による即興表現を通してのみ行われたものであること、運動の分析が空間性について不足していること等客観性において限界はある。しかし、先の研究報告で考察の資料とした学習指導の実践例において、リズムが学習内容として全学年を通してとりあげられていたこと^⑩、「舞踊はダイナミックイメージである」とするランガーが、「舞踏家の肉体はリズムに向けて準備ができていのである」と述べ^⑪、邦正美が、「舞踊は力のリズム的な置換であるということもできる^⑫」としていることなどから考えても、ある程度の客観性を期待しても良いのではないかと思われる。すなわち、「ダンス学習指導は、リズム化に向けて、リズムのあらゆる要素を手がかりに進められる」という一方法が考えられる。

ダンスは、表現形式としての構造の理論と共にその指導法の研究が進められ、一方では学習指導の実践報告もなされるなど、教材として確かな存在となりつつある。しかし、高田典衛がダンス学習指導について、実践によって解明していくという研究は遅れていると指摘している^⑩ように実践の側からの学習指導論の確立が今最も求められることであると思われる。それによってこそ、ダンス学習指導の究極の問題である、理論と実践の差、理論的可能と実践としての不可能の間の大きな溝を埋めることができ、扱いやすい教材としてのダンスを存在させることができるのではないだろうか。今後は、現場での実践を通して研究する機会を得たいと考えている。

参考文献・引用文献

- ① 佐分利育代 ダンスにおける技術と学習内容に関する一考察 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学 第20巻 第2号p187 昭和53年
- ② 松本千代栄 舞踊美の探求 大修館書店 昭和32年 p81
- ③ S.K. ランガー 感情と形式I 大久保他訳 太陽選書 昭和45年 p302
- ④ 邦正美 舞踊概説 京都学校舞踊研究会 昭和23年 P267～p269
- ⑤ 邦正美 教育舞踊原論 万有出版 昭和35年 p64
- ⑥ 石井漢 舞踊の本質と其創作法 人文会出版部 昭和2年 p38～p39
- ⑦ M.N. ドゥブラー 舞踊学原論 松本訳 大修館書店 1974年
- ⑧ S.K. ランガー 感情と形式I
- ⑨ 佐分利育代 ダンスにおける技術と学習内容に関する一考察
- ⑩ 同上
- ⑪ S.K. ランガー 感情と形式I
- ⑫ 邦正美 舞踊概説
- ⑬ 高田典衛 興味を引き出す学習内容の撰択 女子体育 第21巻 第6号 p7

なお、II「力性の変化」を目標とした学習指導と即興表現の内容は、第4回舞踊学会(77)において、「ダンス学習に関する研究(1)」として発表を行った。

(昭和54年9月14日受理)